

アート & カルチャーでねりまをもっと楽しく NERICUL

(公財) 練馬区文化振興協会情報誌「ねりかる」 vol.20.2

別冊

vol.20.2



インタビュー

中井恒仁 & 武田美和子

ピアノデュオ

練馬区演奏家協会コンサート

ショパンの想い～ 祖国への愛

——ショパンについてどんな印象をお持ちですか。

中井 「ピアノの詩人」と言われるようなデリケートな面が表に出やすいですが、実際にはポーランドという国を背負い、当時の不安定な情勢の中、音楽でポーランドのアイデンティティというものを強く発信しようとした「騎士の魂」のようなものを僕は感じます。

武田 とても繊細な部分に加えて、実は男性的な、芯の通ったものが音楽に感じられます。美しい旋律やハーモニーもショパン独特のものがあり、全ての作品にポーランドという国や景色が背景にあるような気がしています。

——ショパンにとってポーランドという国はどのようなものだったと思いますか。

中井 どんな作曲家でも国というものは強く意識するものだと思います。もともと音楽の中心はウィーンで、その後パリでも栄え出しました。ショパンは、ウィーンに行ったけどうまく合わず、パリに行ってもものすごく活躍しました。人を雇えるほど経済的にも恵まれていました。その中でも、自分が外国人であるということや祖国では大変なことが起きているという想いがある、(ポーランドの) 民族性のある、ポロネーズやマズルカがどんどん生まれていきました。ある意味、ショパンの作風がその後の国民学派と呼ばれるような、ドヴォルザークや東欧の音楽の発展に繋がっていったのではないかと思います。

武田 リストやショパンは、ウィーンやパリといった音楽の中心で生まれたわけではありません。外からやってきた立場なので、どこかで「自分の国を想う気持ちを失わないぞ」という意識はあったのかなと思います。

——国を想う気持ちという部分で他の作曲家とショパンは違うのでしょうか。

武田 ショパンには、特に国を想い続ける意志みたいなものを感じますね。

中井 ポーランドという国そのものがなくなってしまうということを経験していることが大きいのではないのでしょうか。ベートーヴェンも基本、楽語はイタリア語で書いていましたが、ナポレオンが攻めてきて、ルドルフ大公が疎開し、そのことを背景に作曲したピアノソナタ第26番『告別』のあたりから、ベートーヴェン自身がドイツ語で楽語を書くようになりました。第25番のソナタは、イタリア語で「alla tedesca(アラテデスカ)」と書いています、「ドイツ風に」という言葉なのに、『告別』の頃、つまりルドルフ大公がナポレオンを避けていく時期からドイツ語になっています。自分たちの文化の存在が危ぶまれた時に、より国ということ強く意識して発信する、というのはあるんじゃないでしょうか。

——**ショパン以外の曲がいくつかプログラムに組み込まれていますが、どんな想いがあるのでしょうか。**

中井 せっかくならデュオの曲も聴いていただきたいと考え、ショパン自身が書いたデュオの作品がそんなにもないこともあって、ショパンに関連したものの中から選曲しています。ショパンがパリで活躍した時、同じパリにいたリストがつくった「メンデルスゾーンの無言歌の主題による2台ピアノのための大コンツェルトシュトゥック」は、2台のピアノを使っているんですが、ショパンとリストがリサイタルで共演したという記録が残っています。ショパンが生きていた痕跡のようなものを想像しながら、聴いていただければと思います。

武田 意外と演奏される機会の少ないリストの曲は、どこかで聴いたことがあるメンデルスゾーンの美しいメロディーがモチーフになっています。壮大なもので、面白いのではないかなと思っています。ショパンとリスト、作品も演奏もスタイルが全然違いますが、お互いに存在は頭の中にあっただと思います。それぞれに大事なものを持っていて、音楽への情熱というのはいずれもすごいものです。

ルトスワフスキはポーランドの作曲家で、ピアノデュオで有名な作曲家です。興味深い曲を書いているので、ポーランドにはこういう作曲家もいるということを知っていただきたく、プログラムに入れました。

中井 リズミックで、和音の響きも斬新、ちょっとジャズっぽいところもあります。

武田 最後に、祖国ということで日本の曲として誰もが知っている唱歌を入れています。いつもプログラムを考える時は、コンサートの始まりから終わりまで聴いていただいた時間の経過、曲の経過によってひとつのステージを楽しんでいただけるような流れを考えるようにしています。

中井 ショパンのいろいろな面が入るように、華麗なもの、悲劇的なもの、デリケートなノクターンのようなもの、こういうショパンらしいところがあるよね、というものは入れるように全体を考えています。

武田 練馬区立美術館で行われていた展覧会（「ショパン—200年の肖像」2020年6月開催）を見させていただき、とても刺激があり、勉強になりました。鑑賞に来ていたみなさんがひとつひとつ真剣に見ている様子にふれて、ショパンは日本人にとってとても特別な、ずっと大事にされてきている存在なんだな、と感じました。今回は、その良さを伝えられたらと思います。

——**演奏する上で作曲家に関する知識や背景などを知ることについてどう考えていますか。また他の人の演奏を参考に聴きますか。**

中井 背景を知っているか知らないかでは、楽譜から感じるものは変わってきます。

武田 もちろん知識や背景を知ることでも必要でそのうえで楽譜をよく見ていると、クレッシェンドなど細かいニュアンスが、なぜここで出てくるのかが分かってくるんです。記号からのメッセージがあります。楽譜を見るとということが一番大事なキーになります。

他の人の演奏を楽しみで聴くことはありますが、演奏の参考のためと思って聴くことはあまりないかなと思います。演奏からよりも楽譜からまず考えますね。

中井 僕の方が演奏を聴くことがあるかな。それを聴いてそのまま真似しようとするのではなく、「なるほど」と思うことを集めることで、自分の栄養にしていく感覚ですね。

武田 オーケストラ作品や他のバージョンで演奏されるものは聴きますね。ピアノについては、巨匠がこの頃はこういうふうには弾いていたんだという興味で聴くことはあります。ただ、どんなに素晴らしい演奏でも、自分が同じ間合いで弾けるかとなると、手の重さも違うし、一緒にはなりませんね。

中井 そう言われると同世代の人のものを聴いているわけではないですね。なんとなく自分が子どもの頃から憧れていた演奏家、今でも憧れがあるような、（何となく）そういう人たちを聴きがちにはなります。

——**ショパンの曲を弾くときに意識することはありますか。**

武田 ショパンの音、響きは、それぞれ曲にイメージするものが違って、言葉にするのは難しいんですが、透明度を高く、ということでしょうか。和音の重ね方、例えば6個の音があったとするとどういった響きのバランスにするか、高音の輝きや低音の並びをどうするのか、音色の選択をすごく丁寧に意識しています。英雄的な曲や華々しい曲でも、エレガントさは失わず、心の動きを求めたい。

中井 すごく上品でありながら、俗っぽくなりやすい民族性のあるものについても高貴なものに仕上げている、貴族的・民族的な両面を持っています。それをどう音で表すかということは気にしています。

——**ソロとデュオ、それぞれ演奏する上で心掛けていることはありますか。**

中井 昔は自分の中ではソロとデュオは違うものでした。デュオは合わせものという感覚、意識が強くありました。今は合わせながら、一体感を持って弾けるようになったので、ソロもデュオも同じような感覚になっています。音楽の集中する焦点が、ソロのほうが一人なのできゅっとコアな部分に集まっている感じがして、デュオだとその焦点が広がっている感じがしています。

武田 二人で一つの音楽をつくる集中の仕方と一人で作っているときの差はありますが、二人で作るときは、芸術的な要素を二人でより広く多くの方向に向けやすいし、それらを突き詰めていった上での芸術性というものをいつも目指しています。曲自体にも2台ピアノはやりとりがあり、対話のようなものが皆さまに伝わるのではないかなと思います。デュオ結成21年目になりますが、その場での対応の自由さのようなものを遊べるようになってきました。

——二人で演奏する際にどうしても譲れない部分が出てきたときはどうしていますか。

中井 こうじゃなきゃいけないということでぶつかることはありません。合わせていてうまくいかないときは、見るパートによって見え方が違うこともあるし、音楽に対する感じ方も違うので、その違いが分かってくると、なんとなく絶対無理ということはなく、譲る譲らないではない、お互いが思う良いところで調和できるかたちになっていきます。

武田 イメージするものが何かは聞きますね。それで、そういう考え方もあるね、となれば、お互い近寄ることができます。今まで何だかよく分からず何でずれているんだろうというところが、急にピタッとなるんです。不思議なのですが、「そういうことね」と思って弾いたら間の取り方も同じになるんです。

歌を歌うということで、メロディーパートを弾いている方の演奏の流れが見えてくると、伴奏側はその歌に対してどうつけていこうかな、となりやすいですね。2台ピアノの場合は、入れ替わることもありますが、どちらかがメインを取ります。それを把握していないと大変なことになります、自分がメロディーだと思って弾いていると(笑)。

中井 いくつかのメロディーが絡み合っているようなときは、より慣れが必要なんですけどね。

武田 その中でもこっちを際立たせて、など分析が必要です。

中井 2台ピアノですと、楽器自体が似たような音がする楽器の場合と全然違う性格の楽器の場合があります。もちろん弾いたときの二人の音色も違い、神経を使います。たくさんの音色、その変化を求めながら調和したものになるかどうかということが大切なんです。

——ピアノを弾いているときは何を考えているんですか。

武田 無心になれば一番幸せです。そういう世界に行ける時は数えるほどだと思います。自分の音を聴いて、最善のところへ行こうとこうかな、ああかな、ともがいている感じです。なので、結構苦しんでいます(笑)。すごく気持ちいいな、と感じて弾くことはあまりありません。そうなっちゃうと、逆に危ないですね、いろんなミスが起こる。どこか我を忘れないように、緊張感と戦っています。

中井 『革命』だとどんな感じの気分なんだろうとか、ベートーヴェンって音が聞こえないってどういうことなんだろうとか、誰か好きな人のことを書いているんだろうとか、練習の時は思っているんですけど、本番の時はそれを思い出しているわけではないです。より音楽に集中して、ある意味無心に近いような自分になっていく感じです。



中井恒仁&武田美和子

日本で唯一、世界でも大変稀な、それぞれのソロとデュオ両部門で「国際音楽コンクール世界連盟 WFIMC」加盟のコンクールで入賞しているピアノデュオ。共に東京藝術大学、ミュンヘン音楽大学大学院修了。1999年にデュオ結成、同年マレー・ドラノフ国際2台ピアノコンクール(USA)入賞。日本各地で多くのリサイタルを行い「日本が誇る真のデュオであり英駿の音楽家である」など高い評価を得ている。

ドイツ、フランス、イタリア、イギリス、アメリカ、韓国、中国の音楽祭やリサイタル等でも活躍。「ナイトの称号を与えるべき音楽芸術」と最高級の言葉で新聞紙上にて絶賛された。

9枚のCDをリリース、レコード芸術誌特選盤等に出選される。3枚のCDが全日空国際線機内番組で放送。テレビやラジオに出演、音楽誌「ショパン」の連載やピアノデュオ特集では表紙を飾る。久留島武彦文化賞受賞。

中井恒仁は、日本音楽コンクールや、ブラームス、セニガリア、ヴィオッティなど多くの国際コンクールで入賞。桐朋学園大学教授、名古屋音楽大学客員教授。

武田美和子は、マリア・カナルスやヴィオッティ国際音楽コンクール他、多くの国際コンクールで入賞。上野学園大学、桐朋学園大学大学院講師。

——公演が延期になったことにより、意識が変わったことはありますか。

中井 人と接するのが大変な世の中になりました。当たり前でできていたことができなくなるということの大きさを感じました。音楽もオンラインで盛んにはなってきましたけど、その中で対面でやる音楽の良さを改めて感じることもあります。

武田 不安感がつぶるニュースや、コンサートの中止・延期などにより落ち込みがちになったりしましたが、そうしたことを経て、音楽に対する思いは強くなった気がします。改めて音楽を聴いて心が和んでいた時期もあったので、そういう大事さを実感しました。少しでも来ていただいた方が元気になっていただければうれしいなと思います。

——生の演奏についてどう考えていますか。

中井 音楽には、人の心を勇気づけたり、癒したりするだけの力があります。生活に必要なじゃないと言われるんですが、人が人らしく生きるためには必要なものであると強く感じています。音楽の魅力というものをより強く伝えたいと思うようになりました。

武田 同じ空間を共有することで、空気の波動やコミュニケーションが生まれます。お互いがそういう空気の中で過ごすことは、画面の中とは少し違います。私たちもお客様の様子を感じながら弾けることが幸せだし、私たちの想いととも音楽を聴いている幸せも感じてもらえれば、お互いに通じ合えるのではないかと思います。

——お客さんに向けてメッセージをお願いします。

武田 ソロと連弾、2台ピアノと、プログラムを吟味して楽しんでいただけたらよいと考えました。ショパンの精神や国に対する想いを感じ、ぜひじっくりと音の世界に浸っていただきたいです。

中井 演奏会に足を運びづらい時期が続きましたが、今は演奏会を開催できるように段々なってきていますので、ぜひ足を運んでいただいて音楽によって一緒に空間を過ごせればと思います。ショパンの祖国への想いに通じ、私たちの祖国、日本の良さも感じてもらえればと思います。

2020年11月18日練馬文化センターにて

練馬区演奏家協会コンサート ショパンの想い～祖国への愛 (6月20日延期公演)

2021年3月22日(月) 18:30開演(18:00開場)

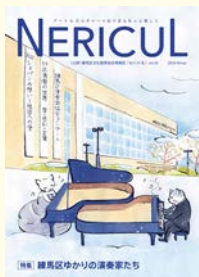
場所 練馬文化センター小ホール

出演 ピアノデュオ 中井恒仁&武田美和子

曲目 ショパン/4手のための変奏曲ニ長調(連弾)、ノクターン嬰ハ短調「遺作」、バラード第1番、「革命」、「別れの曲」、三善晃/唱歌の四季より「朧月夜」、「夕焼け小焼け」ほか
※予告なく変更となることがございます。あらかじめご了承ください。

料金 全席指定 1,000円/友の会 900円 ※未就学児のご入場はご遠慮ください。

感染防止対策の為、席数を制限し現在は販売を停止していますが、追加販売が可能となりましたらホームページ等でお知らせいたします。



NERICUL vol.20 2020 winter

2020年12月25日発行

contents

- 01- 特集 練馬区ゆかりの演奏家たち
- 03- 練馬文化センター・大泉学園ゆめりあホール 1-3月スケジュール
- 04- 練馬区立美術館 1-3月スケジュール
- 05- 石神井公園ふるさと文化館 1-3月スケジュール
- 06- イベントレポート 絵本とあそぶ会(石神井公園ふるさと文化館)

NERICUL

アート&カルチャーでねりまをもっと楽しく
(公財)練馬区文化振興協会発行「ねりかる」vol.20 2020 Winter

別冊 NERICUL (ねりかる) vol.20
発行日/2021(令和3)年2月25日

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、掲載イベントが中止となる場合がございます。詳しくは、お問い合わせいただくか、各施設のホームページ等をご覧ください。

発行：公益財団法人練馬区文化振興協会 東京都練馬区練馬 1-17-37 TEL 03-3993-3311 FAX 03-3991-9666 HP <https://www.neribun.or.jp>